9　　羽根という所　　　　　　　　　読解のつぼ②係り結びの法則

土佐（現在の高知県）での任務を終え、京へ帰る作者ら旅の一行は、次の港へ向け、明け方まだ暗いうちに船を出した。

人みなまだ寝たれば、海のありやうも見えず。ただ、月を見てＡぞ、をば知りける。かかる間に、みな夜明けて、手洗ひ、例のことどもして、昼になりぬ。今し、といふ所に来ぬ。き、この所の名を聞きて、「羽根といふ所は、①鳥ののやうにや　　　　」と言ふ。まだ幼き童のなれば、人々笑ふ時に、ありけるＢなむ、この歌を詠める。

　まことにて名に聞く所ならば飛ぶがごとくに都へもがな

とぞ言へる。男も女も、「いかでく京へもがな」と思ふ心あれば、この歌よしとにはあらねど、②「げに」と思ひて、人々忘れず。この、羽根といふ所問ふ童のついでにぞ、またへを思ひでて、③いづれの時にか忘るる。

語注

羽根＝高知県室戸市羽根。羽根岬がある。

例のことども＝いつも朝にすると決まっていること。顔を洗う、仏名を唱える、食事をする、など。

昔へ人＝亡くなった人。作者は土佐にて女児を亡くしている。

【原文】

人みなまだ寝たれば、海のありやうも見えず。ただ、月を見てぞ、西東をば知りける。かかる間に、みな夜明けて、手洗ひ、例のことどもして、昼になりぬ。今し、羽根といふ所に来ぬ。稚き童、この所の名を聞きて、「羽根といふ所は、鳥の羽のやうにやある」と言ふ。まだ幼き童の言なれば、人々笑ふ時に、ありける女童なむ、この歌を詠める。

　まことにて名に聞く所羽ならば飛ぶがごとくに都へもがな

とぞ言へる。男も女も、「いかで疾く京へもがな」と思ふ心あれば、この歌よしとにはあらねど、「げに」と思ひて、人々忘れず。この、羽根といふ所問ふ童のついでにぞ、また昔へ人を思ひ出でて、いづれの時にか忘るる。

問一　傍線部Ａ・Ｂの係助詞の結びの語を抜き出せ。〈5点×2〉

Ａ〔　　　　　〕　Ｂ〔　　　　　〕

問二　傍線部①について、

⑴　空欄に、動詞「あり」を適当な形に活用させて入れよ。〈10点〉

〔　　　　　　　〕

⑵　係助詞の意味に注意して、現代語訳せよ。〈10点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　〕

問三　傍線部②における「人々」の心情として最も適当なものを選べ。〈10点〉

ア　都に帰る方法に思い悩んでいた時に、その方法を一生懸命教えようとしてくれた女児の優しさに、心打たれている。

イ　都に帰り着くことばかりを思っていた時に、自分たちと同じ思いを素直に詠んだ女児の歌を聞いて、共感を覚えている。

ウ　都にいつまでも帰れないことを嘆いていた時に、皆に気遣って歌を詠んで励まそうとしてくれた女児に、感謝している。

エ　都に帰ることを諦め、気が沈んでいた時に、無邪気に歌を詠む女児の姿を見て、和やかな気持ちになっている。

〔　　　〕

問四　傍線部③の解釈として最も適当なものを選べ。〈10点〉

ア　いつの間にか忘れてしまっていた。

イ　いつもは忘れてしまっているのに。

ウ　いつの日か忘れてしまいたい。

エ　いつになっても忘れることなどない。

〔　　　〕

【解答】

問一　Ａ＝ける　Ｂ＝る〈5点×2〉

問二　⑴　ある〈10点〉

　　　⑵　鳥の羽のようであるのだろうか。〈10点〉

問三　イ〈10点〉

問四　エ〈10点〉

【現代語訳】

人は皆まだ寝ているので、海の様子も見えない。ただ、月を見て、西・東の方角を知った。こうしている間に、すっかり夜が明けて、手を洗い、（毎朝の）いつもおきまりのことなどをして、昼になった。ちょうど今、羽根という所にやって来た。幼い子どもが、この場所の名前を聞いて、「羽根という所は、鳥の羽のようであるの（だろう）か」と言う。まだ幼い子どもの言葉であるので、人々が笑う時に、先ほどの女の子が、この歌を詠んだ。

本当に、その名に聞くとおりここが（鳥の）羽であるならば、飛ぶように都へ帰りたいものです。

と詠んだ。（同行する）男も女も、「何とかして早く都へ帰りたいものだ」と思う気持ちがあるので、この歌がうまいというわけではないけれども、「なるほど（そのとおりだ）」と思って、人々は（この歌を）忘れない。この、羽根という所を尋ねる子どもにつけても、また亡くなった人（＝自分の女児）を思い出して（しまうのだが）、いつ忘れることがあろうか。いやいつになっても忘れることなどない。

【補充問題】

問１　次の語句の意味をそれぞれ答えよ。

①「例の」（２行目）

②「疾く」（７行目）

問２　次の動詞の、活用の種類と活用形を答えよ。

①「見え（ず）」（１行目）

②「見（て）」（１行目）

③「笑ふ（時）」（４行目）

④「忘れ（ず）」（８行目）

問３　「いづれの時にか忘るる」（９行目）における作者の心情を説明したものとして最も適当なものを選べ。

ア　土佐で亡くした女児のことが忘れられず、悲しくなっている。

イ　亡き女児のことをいっそ忘れて、悲しみから逃れたいと思っている。

ウ　土佐に残した女児のことが思い出されて、切なくなっている。

エ　土佐で残した女児との思い出もいずれ忘れるだろうと、沈んでいる。

【補充問題解答】

問１　①いつもの　②早く・すぐに

問２　①ヤ行下二段活用・未然形　②マ行上一段活用・連用形

　③ハ行四段活用・連体形　　④ラ行下二段活用・未然形

問３　ア